

# 自然と歴史との出会い

## — 白井城と白井宿の歴史 —



白井は、利根川と吾妻川の合流点にある河岸段丘上に発達した集落で、大宮姫神社・神明宮を心の寄り所として古代より栄え、郡庁の所在地・伊勢神宮の御厨地だったことも偲ばれる。承平7(937)年編集の『和名抄』の群馬郡13郷名に「白衣郷」とあるのが、最も古い出現である。

中世になって、西方丘上の吹屋に白井城が構築されると、総曲輪を囲む北遠構(約950メートル)・東遠構(約650メートル)の中に、西より吹屋・松原に武士団と職人、丘陵下の白井に町人・農民を中心とした城下町を、後に大小の寺院も配置した。こうして、約300年に亘り、関東管領上杉氏の配下としての白井長尾氏が、主に覇権を振るい、政治・経済・交通・文化

の拠点として成長、以後文化的には特に「白井文化圏」の核とまでいわれた。

近世を迎え城主の交替が頻繁にあり廃城後、東遠構内に居を構えていた白井の住民たちは、岡上代官の命により、中世よりの城下町の利点を生かし、短冊型の町割りをしたのは、寛永11(1634)年より少し前のものである。この時は、白井村、下白井之郷などといい、半農・半商で経済を支え、沼田街道西通りの、沼田・中之条・渋川・前橋のほぼ中間点として草津街道・三国街道にも接続し、利根・吾妻両河の渡河点の利点を踏まえた市場町に更生し、900メートルを越す町並みに、上・中・下の町内が交互に五・十の六斉市を開き、元禄時代(～1700～)頃から盛んになる。文人墨客をはじめ、多くの旅人が往来し、町並みの形態から、宿と呼ぶ者も多かった。今日、「白井宿」と言われているのはその名残りであろう。幕末になり問屋場は設置された。

住民は一般的に「白井町」と呼んでいた。

明治になって清水越往還(現在の国道17号線)の開通により通りから外れ、市場町としての機能を、吾妻川対岸の渋川宿(渋川市)に譲った白井町は、農業を主体とした集落に変容を余儀なくされたのである。

現在、栄枯盛衰、幕末と明治31(1898)年の2度・3度の大火により古い家並みは少ないが、市がたった広い通り、道路の真中を流れる白井堰、生活に潤いを与えたつべ井戸や路傍の石造物などが点在し、昔のたたずまいを今に残す「白井宿」である。

